

炎

上原翠子
すいこ

市立の総合病院で看護婦として忙しく働いていた三十五歳のころ、私には五歳の子供がいた。剛つよしという名の元氣な子だった。幼いのに、いつも自分から進んでお手伝いをしてくれた。

私の主人は運送会社の経理部長をしていた。まだ三十八歳と若かったが、出世して会社のホープと見られていた。私は主人を「努つとむさん」と呼んでいた。

朝七時四十分になると、三人そろって忙しい。主人は車で市街に出勤、八時三十分から会社が始まる。私も車に乗って通勤、同じ時刻から病院の仕事が始まる。

剛を幼稚園に送るのは、主人の役割。剛は幼稚園のあと、預かり塾のようなどころへ行かせ、帰りはバスに乗って一

供にとつては洗濯物は重いはずだ。私は手を貸して、洗い終わった洗濯物の籠をいっしょにしっかり支えて物干し場に行く。剛と並んで午前の陽の光を浴びて洗濯物を干すのだった。

剛は大福餅が大好きで、それをあげると大喜びだった。主人も私も好物なので、家には大福餅が欠かせなかった。

大福を頬張りながら、いつも剛は言っていた。「大福餅は、やわらかくて、丸くて、甘いから、『ほっぺ餅』っていうんだよね」

目を細めて言うそのほっぺが、ほんとうに大福のようで、かわいらしかった。

剛はまたお父さんと遊ぶのが好きだった。主人も、会社でのハードな毎日の仕事の疲れをのんびりと剛と遊ぶことで癒していた。

土曜日になると、剛が言った。

「早く夕方にならないかな。お父さんとキャッチボールするんだ。バットとグローブを用意しとかなくちゃ」と、ワクワクする表情で言った。

やがて主人が帰ってきて、素早く着替えをすると二階からドタドタと降りてくる。

「よし、剛。さあ、行こうか。お待たせだったね」

そう言っただけで剛の頭を撫でると近くの公園へ出て行く。私は夕食の支度に取りかかる。野菜サラダに青菜の炒め物、

人で帰ってくる。月曜から金曜まではこのサイクルだ。三人が揃うことは、土曜日・日曜日くらいだった。

週末になると家族みんなが揃うので、剛は大はしゃぎになる。自分では大サービスのつもりで、幼いのに「洗濯物はまかせといて。ボクが干してくるよ」と言ってくれる。

私はその気持ちがあれしくて、弾むように答える。

「さすが剛くん、来年から一年生になるんだもんね。すごいね。重いけど、だいじょうぶ？ ありがとうね」

剛は生意気に言葉を返してくる。

「おかあさん、来年からなんて言わなくていいよ。だってボク、今でも言われたら何でもできるもん」

剛は言葉通りに、重い洗濯物を抱えようとして、洗濯機の方へ行く。剛は主人に似て背が高い。それでも五歳の子

主人の酒のつまみにカジキとマグロの刺身、そしてメインの剛の好きなカレーは時間をかけてたっぷり煮込む。三人前をきれいにテーブルに並べて準備万端。二人の帰りを待つ。

やがて二人が元氣な声で「ただいまー」と玄関の扉を勢いよく開ける。テーブルに坐ると、スプーンでカレーを大きく掬って口に運びながら、剛は興奮気味に言う。

「あのね。今日は、お父さんが僕の投げたボールを打ったよ。すごく当たりがよくて、向こうの隣のチームの中まで飛んでっちゃったんだよ。ねえ、お父さん」

「うん、よく飛んだね。剛の投げた球がよかったんだよ。ストライク。ど真ん中だったんだ」

私は話に乗って、言う。

「へーえ、そんなに飛んだの。お母さんも見に行けばよかったな。じゃあ、ホームランに乾杯しましょ」

主人のグラスにビールをつぎ、泡が昇ってきたところで、私もちよつとだけ入れる。剛はコーラだ。

「カンパニー！」と声が揃う。みんなで笑って料理を楽しむ。剛も主人もキャッチボールをして気分がいいのだ。話が弾み、食欲も増す。

ゴールデンウィークの最後の日だった。二人でペットショップへ行き、かわいい柴犬がいたので、それをたいそう気に入って、二人で飼いたいと私に言ってきた。もうすで

に予約を取り付けてきたという。

「いいわよ。でも、犬を飼うには犬のお家が必要ね」

と私が言うと、「じゃあ、犬小屋を作る。パパといっしょに」と満面の笑顔で剛が答えた。

その日は日曜日だったが、総合病院に勤める私は当直で出勤だった。私はこんなに天気の良い日には、家にいられたらすることが山ほどあるのにと、愚痴めいた独り言を言いながら、洗濯を済ませた。朝早くからいろいろと雑事を済ませ、九時三十分に家を出た。

一方主人と剛は、犬を迎えるための犬小屋を作ろうとはりきっていた。板材や道具をホームセンターへ買いに行くことになっていた。どんな犬小屋ができるのだろう、どんな柴犬なのだろうと、私は楽しみにしていた。

二人は十時頃出ると言っていた。二人揃ってジャンパー姿だった。息子は「早く行こう」と父にせがんでいる。剛が父を引っ張る手を見ながら、

「私は先に行ってまあす。あなたたちも十分車に気をつけてね」と玄関を出て車を発進させた。

病院の私の仕事場は、外科の混合病棟である。集中治療室といった設備もない時代なので、忙しさが他の病棟と全くと言っていいほど違う。私はあちこちからの声に追い立てられるように病棟回りをしていた。

突然ナースコールで私の名前が呼ばれた。至急話所まで戻るようにとのことだった。

戻ると、電話の受話器が外されたままになっている。警察から「大至急」との電話がかかっていた。受話器を取ると、切迫した声だった。

「もしもし、こちら警察の事故係です。上原さんですね」

「ハイ」

「今すぐ大橋の所へ来てください。御主人とお子さんがダンプに押しつぶされて、事故に遭われています」

私は、仰天した。足が震えた。どういうことだろう。何があったのか――。

婦長さんに伝えて了解を得ると、白衣の上にコートをひっかけてタクシーに乗った。

ほとんど一〇分で現場に到着した。天幕があり、その先に車が見えた。ダンプと電柱に挟まれて、乗用車がV字型に立っている。

V字型の屈折したところで息子の腕がドアに挟まり、ブラブラしているのが見えた。主人の頭はフロントガラスまで飛んだのか、その周囲のガラスが四方八方にヒビ割れていた。頭がハンドルにまだひっかかっていた。

「それでは病院に運びます。奥さん、いっしょに来てください」

警察の人は、私がコートの下に白衣を着ているのを見て

言った。

「奥さんは看護婦さん？」

「ハイ」

「どこの病院ですか」

「市立総合病院です」

「じゃ、そこに運びましょう」

車に近づくと、主人の車の形は原型をとどめていなかった。後方はダンプの前部でグシャッと押しつぶされている。主人の顔面は血がベッタリと流れていた。息子の方も、顔面を強打したらしく、額から眼にかけてポコッと引っ込んでいて、そこが流れる血と混ざりあい、ほっぺの肉の潰れが生々しかった。

私は真っ先にブラブラになった息子の左腕を握り締めた。体の末梢なのに、まだ温かった。そのとき、私の目に溢れるものがあり、どうしようもなかった。

私はパトカーの中で、病棟で死者の最後の処置を終えて、霊安室へ運んでいくときの同僚同士の沈黙をなぜか思い浮かべた。主人と息子がその当事者になる。ただ黙々と歩き、霊安室では、一本の蠟燭と、お線香を立て、部屋を出る。廊下に出て、「お疲れさまでした」とその時になって初めて言葉を交わす……それが主人と息子に対して行われる……そんなことをぼんやりと考えていた。

車が病院に着いた。外来、当直の係が来て、あとは任せ

ることになった。空いている手術室で、同僚が体を拭き、病院の寝巻に着せ替えて、霊安室に運ぶ。そこで一晩を過ごすはずだった。

私はいったん我が家に帰って、食事を済ませ、入浴してから、息子と主人の待つ病院へ戻ることにした。通夜なのだから、きっと病院の同僚たちも少なからず来てくれる。主人の方も経理部長だから、部下や上役が通勤帰りに寄るかもしれない。とにかく眠かった。二、三時間寝よう。目覚まし時計をかけて眠りに就いた。

午後六時前に時計のベルで目を覚ました私は、着替えを済ませると、車を走らせた。

病院に着くと、私は飛ぶようにして息子と主人がいる霊安室へと向かった。時計は六時を回っていた。何人か、すでに見送りに来てくれたらしく、線香が手向けられていた。

私は遺体の二人に話しかけた。

「努さん、剛さん、二人とも痛かったですよ。こんなことになって……」

「今ね、家族三人でいるのよ。黙ってないで何とか言ってください。ボクも痛かったですよ。だって、ボクの腕が、車のドアに挟まっていたんだもん。痛くてもどうしようもできなかったよね。その右顔面を強打したのよね。あつという間の出来事だったよね」

二人に話しかけると、泣きながらも心が安らぐのを感じ

た。

「ごめんね。代われるものなら、代わってあげたい。今はその思いでいっぱい」

私は心の中でずっと会話を続け、あと一時間で消灯の九時になるのに気づいた。

「明日の朝早くに葬儀車が迎えに来ます。もう朝は会えないので、今日は一時間ずらしてもらいました」と私は時計を見ながら、主人と剛に報告した。

「明日はみんなが来る前に、葬儀車が迎えに来ます。私もこれでお別れになります」

「努さん、長い間お世話になりました。あの世でも剛をよろしくお願いますね。それから、剛くんへ。学校はあの世で行ってください。お父さんの言うことをしっかり守って、立派な一年生になってね。いつもあなたのことを忘れない。どこからでも見守っているよ」

私は清拭された二人の顔を、何度も何度も、諦めきれずにもう動かないことを確かめながら、別れを告げた。そのままずっと二人の顔を眺めていたかった。

しかし時間が来て、そこを去らなければならなかった。私は看護婦の詰所に最後に顔を出しておかなければと思いい、同僚に向かって何時間ぶりに声を出した。

「お疲れさま。私はこれで帰ります。後のこと、どうかよろしくお願いします」

主人に「努さん、剛くん」と声を出して呼びかけると、炎はやつと静まり、元の大きさになった。

私はその炎の揺れに、主人と我が子が、この世に留まり、いつまでも私のそばに付き添っている気配を感じた。この世に未練を残し、天国に行かずに、私のそばに付き添おうとしている気がした。

私は二人の遺影の前で、ロウソクの炎を燈して会話をするようにになった。

「そちらはどうですか」とか、「きょうはこんなことがありましたよ」とか声を出して話しかける。「淋しい」とか「心細い」とか言うとき、炎は燃え上がって、大きく揺れる。

事故から一年経ったとき、私は足が悪くなり、動きにくくなったこともあって、大きな仏壇とは別に、自分の部屋に小さな仏壇を作った。そこで二人に話しかける。そこだとだれにも聞こえないはずだった。小さな、私だけの仏壇に向かって、そしてロウソクの炎に向かって、話しかけ、語り続ける。あの時のことが忘れられず、事故のときのことを話し始めると、ロウソクの炎はいっそう高く燃えて、揺れ踊る。

他人から見ると、奇妙な独り言にしか聞こえないだろう。頭がおかしくなっていると見られるかもしれない。でも私には大事な死者との交信であり、会話だった。

翌日と翌々日の二日間、私は休みをもらって家にいた。その間、泣きながら主人の部屋と剛の部屋を片付けた。二人がもう戻ってこない。もうこの世に姿を現すことがないと思うと、身が割かれそうだった。ここにいるのが辛く、一人でいるのが怖かった。

二人の死にはあまりにも強烈で、私は一人この世に残された気がした。

やがて初七日が来て、お寺でお経をあげてもらうことになった。花はユリがいらしい。二人の好きだった大福餅も供えた。いろいろ近所の方から聞いて、それに従ってきれいな花を添え、お経をあげてもらった。

その夜、私は二人の位牌の前で、ロウソクを点けた。その炎を見ながら、ソフトボールをしていた二人の姿を鮮やかに思い出した。剛の腕がボールを投げた。そのときだった。炎が普通より倍も高く燃え上がり、大きく揺れた。炎は踊っているようにも、喋っているようにも見えた。それは私が話しかけるたびに、高く波打って、三〇センチくらい高く膨らんで揺れるのだった。電灯を点けているのにもかかわらず、周囲全体が暗くなって、ただ炎だけが大きく明るくなる。私が二人のことを思っただけに襲われ、泣くと、いっそう波打ち、高く上がってそのまま大きく留まる。私の哀しみに呼応して、応えてくるようだった。私が

こんな生活をもう止めしなければ、とも思った。自分一人の世界ではなく、私には、患者が待っている、と意を固くした。

五年くらいしてから、少しずつ炎は治まるようになってきた。ときおり少し高く燃え上がるくらいに穏やかになってきた。私は努さんと剛くんがこの世への未練を断ち切るうとしていたと思った。

事故から三十年経ったこの頃では、もうロウソクを点けて話しかけても、かすかに揺れるだけになってきた。もう二人とも天国へ行き、向こうで幸せな生活を送っているのかもしれない。あの世で、主人は白髪になり、剛も結婚して子供も大きくなっているのかもしれない。私は寂しいけれど、ほっとした気持ちにもなっている。二人して辿り着くべきところに辿り着いたのだと思う。

私ももうあの世に行き、二人の所へ行く時が近づいている。二人がああ世で待っている気がする。

遠くにぞ 一人残して旅立った

二人の面影

あの世で会えるや

長い間自分の中に閉じ込めていたこの記憶を文章にするのは、たいへん勇気のいることでした。思い出したくない、触れてはならないことのように、自分の中に蓋をしていました。でも、あるきっかけが、その蓋を開けるのを助けてくれました。

かかりつけの病院の待合室で週刊誌をパラパラとめくっていたとき、あるページに「交通事故」の文字が目にとまりました。それを見て、自分のあの記憶もこのまま自分の闇の奥に葬っておいてはいけけないのではないか、という気持ちが湧きました。三十年以上の時の経過と、もう自分も先がないことが、背を押してくれました。

どっと出て来て、一気に書くことができました。でも、やはり辛くて涙なしには書けませんでした。

推敲の段階では、未熟さゆえに、何度も落胆して完成を諦めかけました。でも、どうしても書いておかねばならないと思ひ直しては、また取り組みました。

受賞の連絡が来たとき、ほんとうかしらと思ひました。こんなに大きな賞をいただいて、夢のようです。死んだ夫と息子がだれよりも喜んでくれていると思ひます。剛くん、努さん、よかつたね。

いまあらためて、賞の重みを感じています。今後はますます勉強に精進し、何事にも挫けない精神力で努力していく覚悟です。ほんとうにありがとうございます。心から御礼申し上げます。



上原翠子

うえはら すいこ

- 1941 熊本県生まれ
60 人吉準看護学校卒業
62 熊本県立桜ヶ丘結核療養所勤務
65 熊本高等看護学校卒業
72 大阪市立病院勤務
76 大阪府坂南中央総合病院勤務
その後熊本県立総合病院など熊本県内の病院に勤務
2007 退職 現在に至る
熊本市中央区大江本町在住